

江戸時代も中頃の1779(安永8)年8月(旧暦、以下も同じ。さらに、日本に関わることのみ元号を表示)、当時の日本の姿を研究して多くの原稿に纏めあげ、ヨーロッパでこの国を紹介することになるイザアク・ティチング(Isaac Titsingh, 1744・45?~1812)が、オランダ商館長として長崎の出島に到着しました。

この頃、オランダ本国では対イギリス戦争をきっかけにして、国内が混乱する時期に入っていました。こうした中でもオランダ東インド会社の東洋経営は続けられ、彼の来日はこの時以来3度に及ぶこととなります。そして、通算3年8ヶ月の滞在期間中に、徳川幕府と貿易改善交渉を進める傍ら、我が国の学者や通詞たちと親交を結び、両国の学術交流の発展に大きく貢献したのです。

### 幅広い学識

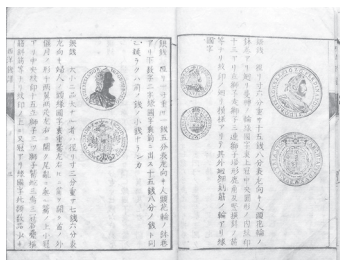
ティチングは初めに医者を目指して医学を学び、その後ライデン大学で法学を修めていたと言われています。東インド会社に入ったのは1766年で、彼が22歳、もしくは23歳の時でした。その後、東洋経営の根拠地であるバタビア(現在のジャカルタ)で穀物倉庫副支配人を務め、長崎の商館長に就任しました。オランダの困窮した国情があったにしても、3度も貿易担当責任者を命ぜられる<sup>(1)</sup>ほどの交渉能力が評価されていたことは、彼が身に付けていた学識と経験が役立ち、さらにはそれらを高めていく関心や好奇心が旺盛であったものと考えられます。

### 日本の知識人との出会い

ティチングが初来日した頃の日本は鎖国体制下にあったものの、この体制が作られた頃とは「鎖国」の実態が大きく変化していました。特に、当時から60年を遡る1720(享保5)年には、幕府が宗教関係書を除いた蘭書の輸入を認めており、ティチング初来日5年前の1774(安永3)年には、杉田玄白らによってドイツ人アダム・クルムスの原著を翻訳した『解体新書』が刊行されるなど、オランダから取り入れられた蘭学は着実に国内の実学を牽引していたようです。

こうした中、1780(安永9)年3月、ティチングは初めて江戸参府を行い、10代将軍徳川家治に謁見しています。この江戸滞在時には、中川淳庵や桂川甫周ら多くの蘭学者がティチングに会ったと言われており、その中には西洋の貨幣を

研究していた丹波福知山藩主の朽木昌綱がいたとされています。この出会いについて、ティチング研究の権威である沼田次郎氏は、「殊に彼も銭貨について趣味を持っていたので・・・昌綱とは意気投合するものがあり、これが両者親交の大きな原因となったようである。」<sup>(2)</sup>と述べています。



朽木昌綱撰『西洋錢譜』天明7(1787)年(本学図書館所蔵)

他にも、朽木と共にこの時期の蘭癖大名の筆頭に挙げられる薩摩藩主の島津重豪も、長崎でオランダ船の内部を見学するなど早くから蘭学に関心を示しており、ティチングとも深い交流を持っていました。さらには、長崎奉行の久世丹後守広民、オランダ通詞の苦雄幸作らとも入魂の間柄であったとされ、離日後も文を交わし合っています。

これらの人物とは、オランダの知識を一方的に与えるだけでなく、ティチングも日本に関する知識や情報を得ており、彼が日本研究を進めていく上での大きな情報源になっていたと考えられます。

奥  
正  
敬

精力的に日本研究を進める  
混乱するオランダに戻れず

イザアク・ティチング、

### 三度目の日本勤務を経てベンガル、北京へ

ティチングは、この江戸参府を終えて長崎に戻り、同年11月に商館長としての一年任期が満了したことから、日本を離れバタビアに戻りました。しかし、翌1781(天明元)年に再び出島商館長を命ぜられ、同年8月に長崎に到着。そして翌年の1782(天明2)年4月には、彼にとって二度目の江戸参府を行い、この旅を利用して蘭学者や蘭癖大名、さらにはオランダ通詞などとの交流をさらに深めたものと考えられます。こうして、1783(天明3)年に離日しましたが、翌1784(天明4)年8月に三度、長崎へ赴任し、幕府との貿易交渉を進展させ同年11月に日本を去りました。その後、ティチングはベンガル長官として1785年にガンジス川河畔の町チンスラへ赴任、1792